

教科学習および社会性と情動の学習 モーリス・J・イライアス(著)
IAE, IBE, UNESCO 教育実践シリーズ 第11号 (2003)

Academic and social-emotional learning by Maurice J. Elias.
IAE, IBE, UNESCO Educational Practice Series-11 (2003).

小 泉 令 三 (訳編)
Reizo KOIZUMI

福岡教育大学紀要 第54号 第4分冊 別刷
平成17年2月

教科学習および社会性と情動の学習 モーリス・J・イライアス(著) IAE, IBE, UNESCO 教育実践シリーズ 第11号 (2003)

Academic and social-emotional learning by Maurice J. Elias.

IAE, IBE, UNESCO Educational Practice Series-11 (2003).

小 泉 令 三 (訳編)

Reizo KOIZUMI

学校教育講座

(平成16年9月10日受理)

目 次

まえがき

はじめに

- 1 学習における思いやりの必要性
- 2 日常生活で用いるスキルの教育
- 3 社会性と情動の教育と学校での他の学習活動との関連
- 4 指導に集中させるための目標設定の利用
- 5 多様な教授方法の使用
- 6 共感性を育てるための地域社会への奉仕の促進
- 7 保護者との連携
- 8 社会性と情動のスキルの着実に体系的な育成
- 9 教育スタッフの訓練とサポート
- 10 実践の評価

結論

引用文献

リソース

前書き

この冊子では、子どもが学校および社会生活での適応に必要な社会性と情動のスキルについて述べる。世界の中には、壁もないような最も簡単な教室から、最もよく整備された教室までいろいろな学校があるが、どこであろうと、学習が成立するには、教師は子どもに適切に接しなければならないし、子どもも互いに協調してやっていかなければならない。社会性と情動のスキル、すなわち“情動の知能”は、子どもが互いに協力し、効果的に学習し、さらに家庭

やコミュニティや作業をする場面で自分の役割を果たそうとするとき必ず必要な能力である。

研究によって、社会性と情動のスキルは子どもたちに教えることが可能であり、それによって教室や学校での教科の学習が改善することがわかっている。教科学習と社会性と情動の学習の両方が学校で身につくなら、子どもはよく記憶し、教わったことをよく活用することができる。さらに責任感や思いやり、そして自分と同じように他の人たちの幸福にも関心をもつことができるようになる。こうして“頭”と“こころ”の両方を鍛えることになり、結果として学級はうまく運営され、子どもはもっとやる気を示すようになる。つまり、教科学習と社会性と情動の学習は世界中のあらゆる学校で、互いに関連しているのである。

教科学習と社会性と情動の学習をよりいっそう促進させるにはどうしたらよいかという点で、多くのことが明らかになっている。この冊子は、そうした促進のための要点をまとめたものである。そして、教科学習と社会性と情動の学習のスキルを育てるための大切なガイドラインが書かれており、また教室や学校に容易に導入できる実用的な応用について、各章にセクションが設けられている。さらに、情報を掲載した特別なセクションがあり、インターネット経由でアクセスできる全世界の機関や組織があげられている。

この冊子は、国際教育アカデミー(IAE=International Academy of Education)が制作

し、国際教育局(IBE=International Bureau of Education)とともに配布を行っている教育実践シリーズの一つの号として作られたものである。国際教育アカデミーはその使命の一つとして、国際的に重要な教育問題に関する諸研究を、適宜集約する作業を行っている。この冊子は、学習の全般的な向上をねらいとする教育実践シリーズの第11号である。

この冊子の著者であるモリス・J・イライアスは、ラトガス大学の心理学教授であり、学習・社会性・情動学習促進協同チーム(CASEL=Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning: www.CASEL.org)の指導者チーム副会長でもある。CASELの仲間とともに、イライアスは「社会性と感情の教育—教育者のためのガイドライン39」(発行:カリキュラム開発指導監督協会)(日本語訳発行:北大路書房)の主要な著者の一人であり、この本は世界中の10万人以上の教育関係者に読まれている。イライアスはまた、十数冊の著書や数多くの論文、本の章、そして新聞や雑誌を書いており、その中には受賞対象となった親のためのコラムも含まれている。イライアスの著書は十数ヶ国語に訳されており、また彼自身、アジア、ヨーロッパ、中東、北アメリカ中で講演を行ってきた。

次の方々、この冊子の草稿段階で査読をしていただき、さまざまな文化に適用できるように、また理解しやすく翻訳しやすいようにと、改善点を示唆してください。ミルトン・チェン:ジョージ・ルーカス教育財団(サン・ラファエル、カリフォルニア)の総括責任者で、メディアやウェブサイト(www.glef.org)により、教育での成功例や技術の使用を推進している。マリオ・ルイス・パチェコ・フィレラ:メキシコのバルサーグループ内サンタ・エングレイシア病院・衛生部門の技術・教育開発マネージャーで、モンテレイにあるダックス・ビジネスリーダーシップ大学院に所属している。ケイシャ・ミッチェル:ジャマイカ国籍で、ニュージャージー州ニューブルンスウィックにあるラトガス大学大学院博士課程の心理学専攻学生である。社会性と情動の学習、社会的サポート、コミュニティ変革における教育の役割などに興味がある。キャサリヤ・モクルエ:タイのバンコク生まれで、現在はニューヨーク市モンテフィオレ医学センターのインターン生であ

る。社会性と情動の教育、家族サポート、そしてコーピングの研究を行っている。レスリー・スワルツ博士:南アフリカの間人科学研究委員会子ども家族発達部門の委員長であるとともに、ステレンボッシュ大学の心理学教授でもある。

国際教育アカデミーでは、この冊子が主に先進国で実施された研究にもとづくものであることを了解している。しかし、内容としては世界共通の学習の側面に焦点を当てている。安定した教育環境(例:通学が中断されない、いつでも利用できる十分な教材がある、家族が極度の貧困状態やHIV/AIDSその他の病気を患っていない)の国に住んでいるなら、ここで示されているものはすべて実施可能であることを、草稿段階の査読者が認めている。さらにある人は、「この冊子は、これ自体が新たな視野を広げるものであり、すべての国々で必要とされている社会性と情動の知能に人々の目を向けさせ、実施を促すものである」と語っている。この冊子で示されている実践は、世界中で一般的に実践可能である。ただしそうであっても、各原則は各国の状況に沿って評価され、採用されなければならない。どのような教育的環境や文化的文脈であろうと、実践のための提案やガイドラインを適用するにあたっては、細心の注意と鋭敏な感覚、そして絶え間ない評価が必要である。

ヘルバート・J・ウォルバーク

IAE 教育実践シリーズ編者
イリノイ大学シカゴ校

はじめに

どのような社会でも、子どもは現在の大人がもっている社会的役割を継承する。私たちの教育システムは、結果として子どもがこうした責任を果たせるように(すなわち社会的役割を引き継ぐことができるように)、子どもを育むという務めを担っている。そのため、世界中で教育の改善が望まれている。ある人たちは教科の基礎・基本を定着させたいと願っているし、ある人たちは健全な批判的思考を重視したいと考えている。また、良き市民性や性格を育てたいと思う人、ドラッグや暴力やアルコールの危険性から子どもを守りたい人もいる。保護者に、より大きな役割を期待する人もいれば、地域社会全体が関与すべきだと感じる人もいる。

しかし、共通理解が得られそうな領域がいくつか出ている。保護者や地域社会の指導者対象

の数多くの調査結果に見られるように、私たちの子どもが何を知り、何ができて欲しいのかということは明白であり、よって学校として何を教えて欲しいのかは必然的に決まってくる。子どもたちには次のようなことを期待しているのである。

- ・何不自由なく読み書きができ、さまざまな形の書き言葉や話し言葉を利用し、その恩恵をこうむることができる。
- ・来るべき将来に役立つようなレベルで算数・数学や科学が理解でき、批判的で慎重で創造的に思考する能力を高める。
- ・問題解決能力がある。
- ・自分の健康や幸福に責任をもつ。
- ・効果的な対人関係を発達させ、グループ作業の方法や、異なる文化と背景をもつ人々を理解したり彼らと関わったりする方法を身につける。
- ・他人に対する関心と尊敬をもって、一人ひとりを思いやる。
- ・社会がどのように機能するかを理解し、将来の発展のために必要な役割を果たせるように準備する。
- ・健全な性格になるように成長し、道徳的に好ましい決断をする。

これらすべての事項は、ある人たちが“全人教育”と呼ぶものの諸側面そのものである。子どもの全人教育は新しい考えではない。それは、多くの古代文化の文書や教えにルーツがある。しかし、今の世界はより複雑化し、地域社会がより細かく分断化されているので、すべての子どもがその持てる力を最大限に発揮して学習や仕事をし、社会に貢献できるほどのレベルにまで高めるのは、依然として難しい課題である。後半の6つのポイントは、性格教育、奉仕学習、公民、情動知能などと呼ばれている教育の諸側面に該当する。これらはすべて、社会性と情動の学習という一語で表現可能であり、教科学習といっしょに考えると、教育者が子どもが必要とするバランスのレベルにまで彼らを到達させることができるとしたら、まさにこの学習によって可能となるのである。

最も重要なことは何かということについて同意しない人もいるが、教育者、保護者、ビジネスリーダー、そして社会政策立案者たちの考えは一致している。子どもが読み書きができ、責任感を持ち、暴力的でなく、ドラッグをやら

ず、思いやりのある大人になるように、学校は子どもを上手に指導しなければならないということである。

読み書きができ、責任感を持ち、暴力的でなく、ドラッグをやらず、思いやりのある子どもに育てようとする試みを、保護者、政策立案者、学校の管理職、そして教師はよく耳にする。経験および研究成果からは、こうした試みの各要素は、子どもの社会性と情動のスキルに注意深く、継続的にまた体系立てて注目することによって、促進できることがわかっている。よって、世界中の学校が、教室や家庭や地域社会で実際に使えるような、知的で実的なスキルを子どもに身につけさせなければならない。社会性と情動の学習は、これら多くのスキルを提供している。子どもが、学習、対人関係作り、効果的なコミュニケーション、他の人のニーズへの敏感さ、周囲の人とうまくやっていくことなどの人生における多くの課題を上手にこなしていくためには、そのための一連のスキルを身につけなければならない。それを可能にする教授法と、学級および学校経営の方法が存在するのである。学校が質の高い社会性と情動の学習プログラムを効果的に導入するならば、子どもの学習成績は向上し、問題行動が減少し、それぞれの子どもの周囲の人との人間関係は改善する。

社会性と情動の学習はしばしば“欠落部分”と呼ばれる。これは、教科の知識と、学校・家庭・地域社会・職場そして人生一般において成功するための重要な一連のスキルを結びつける教育の一部分であるからである。最近の世界的な出来事からわかるように、子どもが知識はもっていても社会性と情動のスキルと高い道徳性をもたずに成長するならば、身の周りであろうと地球規模であろうと、私たち一人ひとりとっては危険なことが起こりうるのである。したがって、教科学習と社会性と情動の学習を合わせたものは、今日および近い将来の世界における効果的な教育の真の基準なのである。

1. 学習における思いやりの必要性

効果的で持続性のある教科学習と社会性と情動の学習は、思いやりのある人間関係と、温かくでも厳しさもある学級や学校環境の中で育てられる。

研究の成果

継続的な社会性と情動の学習や健全な性格、

そして教科学習でのよい成績は、次のような学級や学校で育まれる。つまり、生徒にとって恐れがなく、学習するように励まされるがしかしそれによってかえって気が萎えてしまうことのないような環境である。また、こうした学校は子どもが思いやりをもって教育され、歓迎され、価値を認められ、単なる学習者以上、すなわち有能な人材として扱われる場所でもある。

実践的適用

- ・子どもが学校や教室に入るときに、名前を読んで子どもと挨拶する。
- ・1日の学校生活の初めと終わりに、子どもが最近学んだことや次に学習したいことについて考える短い時間をもつ。
- ・教室内で、協力、思いやり、援助、励まし、サポートなどの好ましい行動を積極的に促すようなルールを作る。
- ・学校外での子どもの個人的な生活に興味を示す。
- ・これまでどのような学習環境がもっともよく、また逆にもっとも悪かったかを子どもに尋ね、この情報を伝えるときに生かす。

推薦論文・著書

Kriete & Bechtel 2002; Lewis et al., 1996; O'Neil, 1997; Osterman, 2000

2. 日常生活で用いるスキルの教育

教科学習および社会性と情動の学習を促進するようなスキルは、すべての学年でしっかりと教えなければならぬ。

研究の成果

キャセル(学習・社会性・情動学習促進協同チーム:www.CASEL.org)は、広い範囲での社会的役割と人生における課題を上手にこなしていく際に、その基礎となる社会性と情動のスキルを明らかにしている。これを行うために、キャセルは脳の機能から学習・教授方法にいたるまで広範囲の領域における多数の研究を検討した。これらのスキルとは、若い人々の学校内外の生活のすべての面での行動を、幅広く導き、ガイドしてくれるものである。下にあげたものがそれらのスキルである。

教科学習および社会性と情動の学習に関してキャセルが提唱する必須スキル

自己と他者の気づき

- ・感情を明確にする:感情を知覚し、言葉で表

すことができる。

- ・応答的である:道徳的で安全で合法的な行動に携わる義務があることを理解する。
- ・長所を知る:好ましい特徴を知り、さらに育てる。

責任ある意思決定

- ・情動をコントロールする:状況に対処する際に悪化させるのではなく、好転させるために感情を制御する。
- ・状況を理解する:置かれている状況を正確に理解する。
- ・目標を設定し計画を立てる:特定の短期および長期の結果を得るために、目標を定め活動する。
- ・問題を創造的に解決する:計画の障害になるものを乗り越え、目標に向けた責任のある行動を取れるように、さまざまな可能性を探ることができる、創造的でしっかりとした手順を踏む。

他者への思いやり

- ・思いやりを示す:他者の考えや感情を知り、理解する。
- ・他者を尊重する:他者が、人類の同胞として、親切と思いやりをもって処遇される価値があることを信じる。
- ・多様性を感謝する:個人間やグループ間の差異は、互いを補い合うとともに、私たちの周囲の世界への適合性を高め、長所となる。

行動の知識

- ・効果的にコミュニケーションをとる:言語的・非言語的スキルを用いて、自己を表現し他者との効果的な交流を促進する。
- ・対人関係を築く:個人やグループと健康的で価値ある関係を築き、維持する。
- ・適切に交渉する:関係者全員のニーズに目を向けることによって、争いごとにおいて、互いに満足できる解決を行う。
- ・挑発を避ける:好ましくない、危険で不道徳な行動は取らないという決意を伝え、効果的にそれをやり遂げる。
- ・助けを求める:必要を満たし目標を達成するためには、適切な援助とサポートが必要であることを知り、それを求める。
- ・道徳的に行動する:合法的・専門的な規則や、道徳あるいは信仰にもとづく行動体系から導き出される一連の原則あるいは基準によって、決定や行動を行う。

実践的適用

- ・対象となる人たちとよく似た人的・状況的環境において効果が示されている、社会性と情動のスキル育成プログラムの採用を考える：プログラムのリストとインターネットアドレスは、www.CASEL.org, www.NASPOne.org, であり、またこの冊子の「リソース」セクションに掲載してある。
- ・キャセルによるスキルのリストを使って、子どもが教科の課題やプロジェクト、宿題、テストに備えられるように援助する。
- ・子どもに、自分たちの生活の中で各スキルの使用が重要になるのはいつなのかを尋ねる。そして、そのスキルを身につけさせ、必要となる状況が生じたときには使用できるように援助する。
- ・週ごとに、キャセルによるスキルリストの一つのスキルを身につけさせ、通常の指導過程でそれを使用させるように仕向ける。年間を通してこれを継続し、各スキルを繰り返すときに自らの実践を振り返り、深めていく。

推薦論文・著書

Connell, et al, 1986; Elias et al, 1997; Elias et al, 2000; Goleman, 1995; Topping & Bremner, 1998; Zins et al., 2003

3. 社会性と情動の教育と学校での他の学習活動との関連

社会性と情動のスキルの日常生活への適用は、学校での一貫性のある、発達段階に適したやり方での援助的な学習活動によって大いに促進される。

研究の成果

小中学校段階での、スキルに焦点化した教育に加えて、喫煙、薬物乱用、アルコール、妊娠、暴力、いじめなどの問題行動防止教育からも、子どもは多くのことを学ぶ。これらの防止教育は、応用的な面がありスキルが明白に強調されているわけではないが、発達段階に即した内容となっている。異なる文化であれば、異なる問題行動を選択し注目するだろう。同様に、子どもは健康的なライフスタイルを見出すための明確なねらいをもった授業からも多くを学ぶ。食習慣、睡眠のパターン、学習や仕事の環境は、教科学習および社会性と情動の学習を推進するための重要な諸領域の一部である。さらにすべての子どもは、葛藤解消のための年齢相応のや

り方を学び、実践してみる機会が与えられる必要がある。つまり、学校は子どもが経験している人生上の困難な出来事に目を向け、ストレスの多い状況でサポートと対処方略を提供しなければならない。典型的には、それらの人生上の困難な出来事にともなって発生する問題を子どもが示して初めて、そうした援助が提供される。不幸にも、その間、多くの子どもが学習への興味を失ってしまうのである。授業妨害が明白でなくとも、子どもたちは教師が教えようと必死になっている学習内容のすべてを理解するのではない。困難な出来事に直面している子どもたちへの社会性と情動面での援助は、教科学習をより促進するような予防的な方法にもなっている。特殊教育の必要がある子どもたちも、社会性と情動のスキルを身につけられるような授業を受け、関連した活動に加えられるべきである。

実践的適用

- ・学校のカリキュラムに、毎年、健康問題に関する学習と問題行動予防のための授業時間を確保する。
- ・困難な状況に直面していたり、その可能性のある子どもたちが、社会性と情動のスキルを身につけられるように、ガイダンスとカウンセリングサービスを関連づける。
- ・教職員が教科学習および社会性と情動の学習をサポートするためにいろいろな工夫ができるように、計画のための時間を設ける。

推薦論文・著書

Adelman & Taylor, 2000; Comer et al, 1999; Elias et al, 1997; Jessor, 1993; Perry & Jessor, 1985

4. 指導に集中させるための目標設定の利用 目標設定と問題解決は、学習への方向づけとエネルギーとなる。

研究の成果

子どもたちは多くのことを学習するように要求される。しかし、それらの学習内容そのものやその学習内容間の関連を理解しないならば、学習したことを覚えていたり、それらを実生活の中で使うことはない。学習が理解可能な目標をもって進められるなら、学習に対する子どもの取組みが深まり焦点化されていくとともに、問題行動を起こすことは少なくなる（成長するにつれて、子どもはゴール設定でより大きな役割を演じることができるようになる）。

複数教科のしかも時間をかけたさまざまな学習を関連づけて統合するような経験は、特に価値あるものである。これは、現在および将来の学校外の実生活と関連する学習経験についても同様である。

子どもはまた問題解決方法を学ぶことによって、多くの利益を得る。これらの方法は、自分たちが直面する新しい状況で適用できる。物語の中には、いろいろな登場人物が問題解決のために検討し、意思決定を行う過程が書かれたものがある。そうした物語を使った指導は、特に内容豊かである。同様のことは歴史や現代の出来事の学習でも言えることである。それらの学習で、子どもは、関連する個人やグループの異なった側面に焦点をあて、関連する人たちが使った（あるいは使ったかもしれない）問題解決過程に注目することとなる。同様のアプローチの使用によって、子どもがどのように科学や数学の問題解決ができるのかを理解できるよう手助けをすることができる。このように学習が行われるなら、子どもが新しい本や新しい状況、そして新しいグループ化の過程に出会うとき、子どもは適用可能な方法を知っており、それを用いて学習や成績が促進され、より成長できることとなる。

実践的適用

- ・子どもに、とても動揺したときにどのように自分の気持ちを落ちつけたかを尋ねる。いらいらしたり困難な状況に陥ったときにその方法を思い出したり、または自分の気持ちを静める方法を教える。
- ・どのように特定の学習領域で成績を上げたり、どのように学級に貢献できるかといったことを含めて、子どもに目標を設定させる。
- ・ある問題解決の方法かまたは関連したものを教え、それを使用している小説や歴史や現在の出来事を理解させる。

ここで歴史関連の例を一つ紹介する。これは現在の出来事の討論に簡単に適用できる。

歴史における重要事件について考える……

- ・あなたが考えようとしている出来事は何か。それは、いつ、どこで起きたか。その出来事を、問題場面か選択場面か決定場面として説明しなさい。
- ・その問題にはどんな人やグループが関係していたか。彼らの感情がさまざまであったとしたら、それはどのようなものか。その問題に

関して、かれらはどのような視点をもっていたか。

- ・これらの人々やグループの一人ひとり、何が起きて欲しかったのか。かれらの目標を書いてみる。
- ・各人や各グループについて、彼らの目指す目標に到達できるような、いくつかの異なった選択肢や解決策をあげる。
- ・各選択肢や解決策について、次に起きたかもしれないすべての出来事を書き上げる。長期と短期の両方の結果を想像する。
- ・最終的な決定は何だったか。どのようにして、そういう決定になったのか。誰によって。理由は、あなたは賛成か反対か。なぜか。
- ・どのように決定が実行されたか。どのような計画だったのか。どのような障害や邪魔ものに出くわしたか。どのように首尾よく問題は解決されたか。なぜか。
- ・再度、考えてみよう。あなただったら、何をしようとしたか。なぜか。

次は、小学校での読み物として使用できる例である。子どもが高学年であるならば、より挑戦性を高められるように、歴史の要素と関連づけることが可能である。

- ・この人物について書いてみよう……
- ・自分の性格に関する問題は……
- ・この問題には、あなたの性格はどのように関係したか……
- ・この人物はどのように感じているのか……
- ・この人物は何が起きて欲しいのか……
- ・どうしてこの人物は、これを起こすことができるのか……
- ・あなたが選んだ登場人物、他の登場人物の一人、あるいは著者に尋ねることができるとしたら、どんなことを聞きたいか……

推薦論文・著書

Cohen, 1999; Elias et al., 1997; Elias & Tobias, 1996; Pasi, 2001; Topping & Bremner, 1998

5. 多様な教授方法の使用

教科学習および社会性と情動の学習の指導は、すべての学習者のさまざまなスタイルや好みに応えられるように、多様な様式やアプローチを用いなければならない。

研究の成果

教科学習および社会性と情動の学習は、さま

さまざまな子どもに対してさまざまな方法で実施されるときに最善の結果が得られる。それで、いろいろと異なった様式を用いた指導による教育経験は、すべての子どもに適用可能である。また彼らが自身のスキルを獲得できるように導き、教室環境が自分たちの好みの学習方法になっていると感じるようにする。ここでいう様式とは、モデリング、ロールプレイング、芸術、ダンス、ドラマ、材料や装置を使った作業、デジタル・メディア、コンピュータ技術、そしてインターネットを含んでいる。また、適切な指導には、通常の建設的なフィードバック、イエス・ノーで答えられないオープンエンドの質問を含んだ討議、そして学校生活のすべての面で社会性と情動のスキルを使用するように頻繁に促すことが重要である。

実践的適用

- オープンエンドの質問や、子どもが選べるような選択肢、指導者やクラスメイトに対して学習内容を繰り返すように指示することによって子どもの理解をチェックすること、ロールプレイング、そして教師の話などの教授法をバランスよく使用する。
- 子どもの学習形態について、大きなグループ、小さなグループ、2人組、1人、コンピュータ使用、インターネット使用、デジタルメディア使用といったように、指導法に変化を与える。
- 異年齢での学習の機会を用意する。
- 子どもたちが1日の間に、自由に動いて異なった学習経験がもてるように、学習センターを設ける。こうしたセンターは、ハワード・ガードナーによる多次元的情能の概念に関連づけることができる。すなわち、ある者は触覚が重要で、直接手で触るような学習を好む。その他、ある者は書くこと、ある者は美術や音楽、そしてある者はドラマや創造劇でのダンスなど、人によってさまざまに異なるのである。
- 子どもがいろいろな教科領域で学んだことを表現させるようにし、それを他の子どもや保護者や地域社会の人々と共有する。
- 専門家や地域社会の他の人たちを呼んで、知識、スキル、習慣、話を子どもと共有する。

推薦論文・著書

Gardner, 2000; Johnson & Johnson, 1994;

Ladd & Mize, 1983; Lambert & McCombs, 1998; Noddings, 1992; Salovey & Sluyter, 1997; Topping, 2000

6. 共感性を育てるための地域社会への奉仕の促進

社会性と情動のスキルを一般化し、特に共感性を育てるためには、地域社会での奉仕が重要な役割を担っている。

研究の成果

地域社会での奉仕は、学校生活のごく初期の段階から開始し、すべての学年で継続する。これは、適切に実施されるなら、子どもが生活に必要なスキルを身につけ、それらを統合し、適用し、いろいろ考慮し、そして他の人に伝えるようになる。この過程は子どもの学習を確実なものとし、また他の子どもたちが地域社会での奉仕に関わろうとする雰囲気をもっと強いのにするのにも役立つ。奉仕の経験は通常、他の人たちや他の考えと出会う機会を提供してくれる。また、自分の視点を広げたり、共感的な理解や周囲の世界との思いやりに満ちた関係がもてるようになる状況も経験できる。多くの若い人々にとって、地域社会での奉仕は自分が所属する重要なグループ内で、気持ちよく貢献していこうとするメンバーになる必要性を育てる機会ともなる。これによって子どもは、将来の自分の職場や家庭のようなより大きな社会での自らの役割に対して、備えができていく。さらに、子どものたましいを育て、大きな世界の一部として自分を位置づけつつ、満たされた人生では重要な意味をもつ理想や信念を育てることとなる。

実践的適用

- 年少の頃から、子どもが学級の好ましい機能に貢献していることがわかるように、学級内で奉仕の機会を提供する。例えば、椅子運び、掃除、教師や他の子どもの手伝いなどである。
- 地域社会で、子どもが援助的な役割を取れるような機会を提供する。例えば、学校周辺の環境整備、高齢者の援助、傷病者へのいたわりと援助などである。そうした機会は、まず「準備」から始まる。自分がこれから関わろうとする状況として、例えば高齢者のもつ病気や困難さを理解する段階である。そして、奉仕活動の「実践」段階となる。子どもの年齢と安全性を考慮した上で、直接、奉仕活動に

関わる。そして「振り返り」段階では、自分の経験とそれについて感じたことを話したり書いたりする機会を設ける。最後には、学んだことを「発表」する機会が必要である。友達、下級生、保護者、そして地域社会の他のグループの人たちに、自分たちのしたこと、その理由、どのように感じたか、何を学んだかを趣向を凝らして伝えるのである。

推薦論文・著書

Berman, 1997; Billig, 2000; National Commission on Service Learning, 2002

7. 保護者との連携

子どもの教科学習および社会性と情動の学習を進めるために、学校と連携して保護者に関与してもらえらるなら、成果はより大きなものとなる。

研究の成果

社会性と情動の学習を進めるために家庭と学校が緊密に連携をとるなら、子どもの学習はより成果が上がり、プログラムの効果はさらに持続して浸透していく。ますます多くの子どもが大衆文化、インターネット、テレビ、音楽、ビデオ、そして大人によってコントロールされていない他の媒体にさらされている。それで、子どもの日常生活で中心的な世話をする大人が、健康増進について連携の取れた強いメッセージを送ることはより重要になっている。保護者、学校、地域社会、そしてさらに社会のすべてが、子どもの社会性と情動のスキルを育てることは重要であり共通した関心であると認められている。この冊子の「リソース」セクションには1冊の本が紹介されており、保護者が好ましい家庭の雰囲気を作り出し、子どもの社会性と情動のスキルを育て、家族の責任と学校の役割がすべうまくいくように進めていく際に助けとなる。「情動の知能による子育て」という題の本がそれで、現時点で少なくとも10ヶ国語に翻訳されている。

実践的適用

- ・子どもがある時期に学習しようとしている教科および社会性と情動のスキルの一般的全体像を、保護者に示しておく。
- ・学校での学習の支援の仕方と子どもの育て方について、保護者がアイデアを交換するための話し合いの機会を用意する。
- ・保護者自身の自己コントロールの維持と怒り

に任せてしつけをしない方法を、保護者に教える。

- ・朝、日常的にやることや、宿題をすませるやり方を保護者に教え、いさかいを少なくする。
- ・子どもが希望の感覚をもてるように、問題があっても子どもと楽しいときをもつことの重要性を保護者に伝える。
- ・日常的に保護者が学級や学校に貢献できる機会を、保護者に提供する。
- ・子どもの図工や美術の作品、また他のプロジェクトを学校の入り口近くに展示し、学校が保護者を歓迎する雰囲気を作る。
- ・保護者と子どもが適切な方法でいっしょに活動できるような機会には、家族単位で指導をしたり、家族で取り組むプロジェクトの時間を設ける。

推薦論文・著書

Christenson & Hays, 2003; Elias et al., 2000; Epstein, 2001; Huang & Gibbs, 1992

8. 社会性と情動のスキルの習得で体系的な育成

学校での社会性と情動の学習の実施は、一種の改革であって、現状でのその学校の特色にもとづくものでなければならぬし、数年間の期間をかけて順次、段階を迫って進められるものである。

研究の成果

社会性と情動の学習プログラムを選定し実施するには、地域社会のニーズ、関心、支持を考慮しなければならない。具体的には、スタッフの力量・仕事量・余裕、現在の教育的取組みや諸活動、プログラム教材の内容と質、子どもの実態から見た発達の・文化的適合性、保護者と地域社会住民の受け止め方である。社会性と情動の学習の取組みは、しばしばまず試行版が導入される。スタッフにとっては、現在使用しているやり方が自分のものとなり、自信をもつようになるのに一般的に2~3年はかかる。いったん実践が始まれば、その取組みは学校のスケジュールの日常実践の一部となり、地方や国の教育目標との関係で位置づけられ、また法的基準や要求に従わなければならない。さらに、教育行政、教育関係者の団体、質の高い教育を求める地方公共団体や政府のメンバーからの正式な支援を受けることにもなる。特に重要なのは、教科学習と社会性と情動の学習の関連づ

けである。社会性と情動の学習は、独立した教科ではない。むしろ、読み書き、算数・科学の指導、歴史や現代の文化、保健体育の学習、そして芸術と結びついたものでなければならない。これらすべての領域で、先に説明した教科学習および社会性と情動の学習の必須のスキルは、子どもの学習への取組みを活性化し、問題行動を減らして、学習内容のより深い理解と質の高い教育をもたらすのである。

実践的適用

- ・教育プログラムを計画し、調整し、指導する立場の人たちに、時間と必要な場所・材料・情報などを提供する。
- ・学校で教科学習と社会性と情動の学習が互いにどのように適合するかを明確に示すことができるように、説明の方法を工夫する。
- ・社会性と情動の学習の取組みは、初めは、社会性と情動の教育の原理およびプログラムに精通した者による小規模の試行プロジェクトを実施することから始める。
- ・試行プロジェクトの結果を踏まえて、次の段階の新しい試行プロジェクトやより本格化した取組みを計画する時間を確保する。

推薦論文・著書

Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning, 2002; Elias et al., 1997; Novick et al., 2002; Utne O' Brien et al., 2003

9. 教育スタッフの訓練とサポート

効果的な教科学習および社会性と情動の学習は、すべての教職員の計画的な専門性の向上と、実践初期の何年間かの間の支援システムによって可能となる。

研究の成果

社会性と情動の学習は、多くの教育関係者には比較的新しいものである。それで、忍耐をもってもらふことと、この新しい領域を学ぶチャンスが必要である。教科学習および社会性と情動の学習では、教職員の継続的な専門性の向上と実践過程での取組みに対する支援がないなら、持続的な成果は期待できない。スタッフの訓練として、子どもの社会性と情動の発達、モデリングと効果的な教育方法の練習、多様な指導法、一般的なコーチング、そして同僚からの建設的なフィードバックについて時間が必要である。スタッフはまた、この領域での「最高

の実践」をよく知っていなければならない。それは、最も効果的なやり方を教師が利用できるようにするためである。キャンセルは、最高の実践を紹介するという面で、重要な役割を担っている。「安全と健全」というしおりはインターネットで入手でき、教育者が自分たちの特定の状況に最も適したプログラムとやり方を見つけられるように、ガイドラインと情報を提供してくれる。

実践的適用

- ・社会性と情動の学習に取り組んでいる人たちに、質の高いスタッフ研修と社会性と情動の学習プログラムや教え方についてのサポートを提供する。
- ・すべての教職員に関連する専門的研修を提供する。これには、社会性と情動の学習スキルを育てるために、学校全体での取組みをどう推進したらよいかということについての訓練を含める。
- ・特に初期の何年かの間は、実践のサポートに責任をもつ校内の委員会を設置する。

推薦論文・著書

Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning, 2002; Kessler, 2000; Lantieri, 2001; Leiberman, 1995

10. 実践の評価

社会性と情動の学習の取組みについての評価は倫理的責任の一端であり、実践の継続的なモニター、結果の評価、教師と子どもの意見や反応を理解することが含まれる。

研究の成果

学校が子どもを受け入れるとき、学校はそれらの子どもを将来に向けて教育することを誓約する。もし、学校が自分たちの取組みの結果を保証できないなら、学校にはその実践をモニターし、続けて改善を図るという倫理的な責任がともなう。したがって、学校はすべての領域で子どもの学習とその成果を追跡する方法が必要であり、社会性と情動の能力の発達もそこに含まれる。SELの取組みは定期的にモニターすべきであり、複数の指標によってプログラムが計画通りに実施されているかどうかを確認する必要がある。それに加えて、実施中のプログラムの結果についての情報や学習者の満足度についても、複数の方法で系統的に集めるべきである。指導は、状況の変化に合わせてなさ

れなければならない。この状況の変化への適合は、社会性と情動の教育の実践者と受け手の意見を検討することによって可能となる。また、社会性と情動のプログラムの実践および教科指導との関連づけ方を記録することや、学校内のさまざまな子どもの集団で観察される結果を評価すること、そして、校区内の諸機関・組織などの資源、州の新しい案、科学的進歩など現在起きている新しい動きをモニターし説明することによっても、状況の変化への適合は進められる。

実践的適用

- ・計画された SEL の活動が実際に実施されているかどうかを確認するチェックリストを用いる。
- ・スタッフが実践した授業を評定したり、授業についてコメントする機会をスタッフに与える。何がうまくいき、何が将来の改善点かに注目するためである。
- ・SEL の活動の中で最も好きなものと最も好きではないもの、学習したスキルを実際に使用した回数、そして指導改善のためのアイデアを調べるために、子どもとスタッフ対象の簡単な調査を実施する。
- ・学校の教職員（そして、できれば保護者）に、子どもの教科および社会性と情動のスキルが上達したときに、それはどうやってわかるかを尋ね、またこの上達がどの程度のものかを調べる指標を考える。
- ・通知表や成績を知らせる他のやり方の中に、SEL のスキルのリストに関連した指標を掲載する。これは、学校で実施している SEL の説明責任を果たすためであり、必要とされる指導改善を考える手段となるからである。

推薦論文・著書

Elias et al. 1997; Fetterman et al. 1996; Harvard Graduate School of Education, 2003; Weissberg & Gullotta, 1997

結 論

教育は変化している。教科学習および社会性と情動の学習は、子どもが学校教育を受けている間に身に付けるべき基本的事項とされる新しい基準になりつつある。この学習は、すべてではないが相当数の教育者には耳新しいことであるため、この冊子には、社会性と情動の学習の取組みのスタートを助けたり、すでに始め

ている取組みを維持するためのアイデアをまとめた。すべての学校で、学習に価値が置かれ、夢が生まれ、リーダーが育てられ、子どもの才能（これがすべての地域社会に共通した最も有効な資源）が花開くようにと考えられている。

私たちの子どもは、学校や家庭のみならず、地域社会、将来の職場や家庭、さらに周囲の世界にとって重要である。一人ひとりの子どもが可能性をもっている。その可能性はすべての子どもが同じではないが、すべての子どもはその可能性を発揮させる機会を与えられるべきである。教科学習および社会性と情動の学習の組み合わせは、この目標を達成する見込みが最も高い。また、その過程で教育者側は、子どもが人生の試練を乗り越え、市民としての責任を全うできるように導く。さらに、教養と責任感があり、暴力的でなく、ドラッグをやらす、思いやりのあるライフスタイルを身に付けられるように育てるのである。これはたやすい仕事ではない。新しいスキルを身に付けさせるには忍耐が必要である。将来の生活に向けて子どもを備えさせるには周囲の大人に負うところが多いが、途方もなく大きな忍耐が必要なのではない。それは、大いに責任あることであり、しっかりと取り組む価値のあるものである。

引用文献

- Adelman, H. S., & Taylor, L. (2000). Moving prevention from the fringes into the fabric of school improvement. *Journal of Education and Psychological Consultation*, 11(1), 7-36.
- Berman, S. (1997). *Children's social consciousness and the development of social responsibility*. SUNY Series: Democracy and Education.
- Billig, S. (2000). The impact of service learning on youth, schools, and communities: Research on K-12 school-based service learning, 1990-1999. Available: <http://www.learningindeed.org/research/slresearch/slrschsy.html>
- Christenson, C.L., & Haysy, L.H. (2003). Family-school-peer relationships: Significance for social, emotional, and academic learning. . In J.E. Zins, R.P. Weissberg, H.J. Walberg, & M.C. Wang (Eds.), *Building school success on social and emotional*

- self-assessment and accountability*. Newbury Park, CA: Sage.
- Gardner, H. (2000). *Intelligence Reframed: Multiple Intelligences for the 21st Century*. NY: Basic Books.
- Goleman, D. (1995). *Emotional intelligence: Why it can matter more than IQ*. New York: Bantam Books. [available in many international editions]
- Harvard Graduate School of Education (2003). *The Evaluation Exchange*. Cambridge, MA: www.gse.harvard.edu/http://eval/archives.html.
- Huang, L., & Gibbs, J. (1992). Partners or adversaries? Home-school collaboration across culture, race, and ethnicity. In S. Christenson and J. Close Conoley (Eds.), *Home-school collaboration: Enhancing children's academic and social competence* (pp.81-110). Silver Spring, MD: National Association of School Psychologists.
- Jessor, R. (1993). Successful adolescent development among youth in high-risk settings. *American Psychologist*, 48, 177-126.
- Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (1994). *Learning together and alone: Cooperative, competitive, and individualistic learning*. Needham Heights, MA: Allyn and Bacon.
- Kessler, R. (2000). *The Soul of Education: Helping Students Find Connection, Compassion, and Character at School*. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development.
- Krize, R. and Bechtel, L. (2002). *The morning meeting book*. Greenfield, MA: Northeast Foundation for Children.
- Ladd, G. W., & Mize, J. (1983). A cognitive social-learning model of social-skill training. *Psychological Review*, 90, 127-157.
- Lambert, N. M., & McCombs, B. L. (Eds.). (1998). *How students learn: Reforming schools through learner-centered education*. Washington, DC: American Psychological Association.
- evaluation: Knowledge and tools for Wandersman, A. (1996). *Empowerment*. Westview Press.
- Peterson, D. M., Katarian, S. J., & Westview Press. *Educators and Improving Schools: Community Partnerships: Preparing*
- Epsstein, J. L. (2001). *School, Family, and Development*. [also in Japanese] for Supervision and Curriculum *educators*. Alexandria, VA: Association and emotional learning: Guidelines for & Shriver, T. P. (1997). *Promoting social*. N. M., Kessler, R., Schwab-Stone, M. E., Frey, K. S., Greenberg, M. T., Haynes, Elias, M. J., Zins, J. E., Weisberg, R. P., Rivers Press. *child*. NY: Random House /Three *disciplined, responsible, socially skilled parenting: How to raise a self-*
- S. (2000). *Emotionally intelligent* professional Resources, www.mprinc.com.
- Elias, M. J., Tobias, S. E., & Friedlander, B. *Schools: Curriculum Materials for Problem Solving Interventions in the* *Educators*. Distributed by National *Journal of Educational Research*, 10, 245-345.
- Elias, M. J., & Tobias, S. E. (1996). *Social* *education evaluation, International* *education*. L.K. (1986). School health *Connell, D.B., Turner, R.R., Mason, E.F., & Press*. *education*. New York: Teachers College *child: The Corner process for change in* *education*. E. T. (Eds.) (1999). *Child by* *learning programs*. Chicago: Author.
- Comer, J. P., Ben-Avie, M., Haynes, N., & *evidence-based social and emotional sound: An educational leader's guide to* *Emotional Learning*. (2002). *Safe and Collaborative for Academic, Social, and Teachers College Press*.
- the passage into adolescence*. New York: *hearts: Social emotional learning and* *learning*. New York: Teachers College *learning*. New York: Teachers College

- Association.
- Lantieri, L. (Ed.). (2001). *Schools with spirit: Nurturing the inner lives of children and teachers*. Boston: Beacon Press.
- Leiberman, A. (1995). *Practices that support teacher development*. Phi Delta Kappan, 76, 591-596.
- Lewis, C.C., & Schaps, E., & Watson, M.S. (1996). The caring classroom's academic edge. *Educational Leadership*, 54, 16-21.
- National Commission on Service Learning. (2002). *The power of service Learning*. Newton, MA: Author.
- Noddings, N. (1992). *The challenge to care in schools: An alternative approach to education*. NY: Teachers College Press.
- Novick, B., Kress, J., & Elias, M. J. (2002). *Building learning communities with character: How to integrate academic, social, and emotional learning*. Alexandria, VA: ASCD.
- O'Neil, J. (1997). Building schools as communities: A conversation with James Comer. *Educational Leadership*, 54, 6-10.
- Osterman, K. F. (2000). Students' need for belonging in the school community. *Review of Educational Research*, 70, 323-367.
- Pasi, R. (2001). *Higher Expectations: Promoting Social Emotional Learning and Academic Achievement in Your School*. NY: Teachers College Press.
- Perry, C.L., & Jessor, R. (1985). The concept of health promotion and the prevention of adolescent drug abuse. *Health Education Quarterly*, 12, 169-184.
- Salovey, P., & Sluyter, D. (Eds.) (1997). *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York: Basic Books.
- Topping, K. (2000). *Tutoring: Educational Practices Series, Booklet #5*.
- International Academy of Education (IAE) and the International Bureau of Education (IBE), <http://www.ibe.unesco.org>.
- Topping, K.J., & Bremner, W.G. (1998). *Promoting social competence: Practice and resources guide*. Edinburgh: Scottish Office Education and Industry Department.
- Utne O'Brien, M., Weissberg, R.P., & Shriver, T.P. (2003). Educational leadership for academic, social, and emotional learning. In M.J. Elias, H. Arnold, & C. Steiger (Eds.), *EQ + IQ= Best Leadership Practices for Caring and Successful Schools*. Thousand Oaks, CA: Corwin Press.
- Weissberg, R. P., & Gullotta, T. P. (Eds.). (1997). *Healthy children 2010: Establishing preventive services. Issues in children's and families' lives, Vol. 9*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Zins, J. E., Weissberg, R. P., Walberg, H. J., & Wang, M. C. (Eds.) (2003). *Building school success on social and emotional learning*. New York: Teachers College Press.

リソース
(省略)

訳者あとがき

本冊子は、その「まえがき」にもあるように、国際教育アカデミー (IAE=International Academy of Education)が制作し、国際教育局 (IBE=International Bureau of Education)とともに配布を行っている教育実践シリーズの一つの号である。IAEは1986年、IBEは1925年に設立された非営利団体であり、IBEは1969年にUNESCOに加盟している。本冊子は次のインターネットサイトから直接ダウンロードすることができる。

<http://www.ibe.unesco.org/International/Publications/EducationalPractices/EducationalPracticesSeriesPdf/practice.pdf>

本冊子の翻訳は、米国イリノイ大学シカゴ校に本部のあるCASEL (学習・社会性・情動学習促進協同チーム)のロジャー・ワイスバーグ教授の誘いによるものである。冊子自体が無料であるとともに、各国の賛同者がボランティアで翻訳にあたってきた。

内容は表題および本文を読めばわかるように、次の世代を担う子どもの自己と他者の関係性を育て、それを土台として教科学習を進めるための10項目のポイントを簡潔にまとめたものである。要点を絞り込んであるとともに、その根拠やさらに詳細に検討を試みたい人のために、充実した引用文献が掲載されている。また、スペースの関係で省略したが、具体的な情報を求める人のために「リソース」のセクションには、インターネットサイトも載せてある。それらを得たい方は、冊子本体を入手してほしい。

教育はどの時代でもまたどの国・地方でも大きな課題であるが、その根幹をなす人間関係の育成が軽視されているというのが、著者の基本的な立場である。地域や時代によっては、それは主に家庭や地域社会で育まれてきたが、今もしそれが不可能になりつつあるのであれば、学校で取り上げるべきであると訳者も考える。ただ、現在のところ、そうした人間関係に関する教育を体系的に実施してきた経験がない国や地方では、多くの戸惑いと困難がともなうのは必然である。

実は日本もそうした国の一つではないだろうか。時代の変化にともなって教育問題が変化し、それらへの対策が検討され、さらに実施されているが、事態は大きな改善の兆しが見えない。

い。そうした状況で、この冊子にまとめられた学習内容は、十分に試行の価値があると考えられる。わが国では、本冊子の著者であるイライアス教授が中心になって執筆し、本冊子にも紹介されている図書 (イライアスら、1999)が翻訳出版されている。さらに、それを具体的なカリキュラム構成に生かすための提案も出された (小泉、2005)。次は、実践の段階であると確信している。

なお、訳にあたってはできるだけわかりやすい日本語を心がけたつもりであるが、原書の意図を正確に伝えたいとの願いとの両立が難しい箇所もいくつかあった。その点は、ご容赦願いたい。それとともに、不明な点や誤訳の可能性のある場合には、遠慮なく次のアドレスまで問い合わせていただきたい (koizumi@fukuoka-edu.ac.jp)。

引用文献

- イライアス M.J.・ジンズ J.E.・ワイスバーグ R.P.・フレイ K.・グリーンバーグ M.T.・ハynes N.M.・ケスラー R.・シュワブストーン M.E.・シュライバー T.P. 小泉令三 (編訳) 1999 社会性と感情の教育—教育者のためのガイドライン 39—北大陸書房
- 小泉令三 2005 社会性と情動の学習 (SEL) の導入と展開に向けて 福岡教育大学紀要, 54(4), 113-121.